

張壱淳先生10周忌の集いに原州を訪問して 飛田雄一

5月21日から24日、久しぶりに韓国を訪問した。原州で活動されていた張壱淳先生の10周忌の会に招待され、保田茂(神戸大学名誉教授)、一色作郎(有機農業農民、兵庫県市島町)、信長夫妻、朴淳用(留学生)の各氏と私の6名での参加であった。行事には日本から大阪エスコープのメンバーも参加されていた。

張壱淳先生の号は無為堂、生命思想を唱えた「在野の元老」としてよく知られた方で、金芝河の先生にあたる。1994年5月22日に66歳で亡くなられたが、同年10月、一色さんとお墓参りに訪問した。その訪問記と李泳禧先生の追悼文(『ハンギョレ新聞』1994.5.24)を『むくげ通信』147号(1994.11)に掲載している。



あいさつする保田茂氏と金栄柱氏

张先生は何回か神戸学生青年センターを訪問されている。韓国カトリック農民会の精神的リーダーでもあり、1970年代には朴正熙軍事政権に反対する民主化運動を担うなど積極的な活動をされた。しかし先の李泳禧先生の追悼文によると「一つの時代を変革なさったその大きな業績にも関わらず一生を“一粒の小さな栗(一栗子)”を自認しながら生きてこられました」という。

今回の10周忌の行事は、三冊の本の出版記念会、モニュメント建立式と関連の文化行事であった。出版された本は

- ①『나락 한알 속의 우주 (落ちた一粒の中の宇宙)』(緑色評論社、再版)
- ②『너를 보고 나는 부끄러워네(あなたを見て私は恥かしい)』(緑色評論社)
- ③『좁쌀 한알 (栗一粒)』(トソル出版社)。



左から①②③

5月21日、9:40のKALで仁川空港へ。空港から原州「土地記念館」に直行した。この記念館は長編小説『土地』の作者=金芝河の母・朴景利さんが作られ館長をされているものだ。金芝河さんの基調講演には残念ながら間にあわなかつたが、その日は、夜遅くまで、張先生のドキュメンタリ放映や討論会など盛りだくさんの行事があった。



左から保田、一色、飛田、信長たか子

翌日は午前中に生協運動の方向性等をめぐって熱心な討論会があり、昼には張先生の墓地で記念碑の除幕式があった。そして、みなでお墓参りをした。



記念碑前で久しぶりに会った金景南氏と私(右)

午後、博物館に場所を移した。そこでは、張先生の詩・書などをテーマにした展示があった。張さんは書画家としても有名で、張さんからいただいた絵が学生センターにも飾ってある。ずっと見ても飽きない素敵な絵だ。「富國都城之榮華不如野花之樂」とある。

展示会で素敵だと思った1枚は、張先生の詩を別の画家が墨絵にしているもので、1本の道がシンプルに描かれておりその道が切れている所に一人の人が立っていた。その詩は、急ぐことはないのであって貴方が歩いた所までが道なのですよ、というような詩だった。写真を撮り忘れたのが残念だ。

博物館の庭ではサムルノリなどの文化行事が繰り広げられていた。出し物のひとつは在日歌手の李政美さん。張先生の記念行事にボランティアでかけつけたとのこと。トークもきまっており、拍手喝采を受けていた。日差しのきついいい天気で大変だつただろうと思う。一方、観客の方は歌を聞きながらマッコリを飲んだりしていた。40リットル入り?ポリタンが何本も並んでいた。もちろん私たちも、大いに飲んだ。



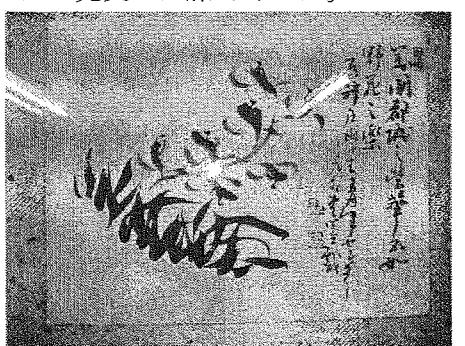
熱唱する李政美さん

夜は、サウナだという。張先生の支援者のサウナ経営者が貸切で提供してくれた郊外のサウナ。交流しながら、まさに裸と裸のつきあいだ。150人ぐらいは泊まっていたのではないかと思う。ゴザを被ってはいる韓国式サウナも始めて経験した。

翌23日は、この方もセンターの有機農業運動と大いに関係のある車興道牧師の農村教会と元留学生・金起燮・鄭燦圭両氏の働く生協を訪ねた。夜は保田先生のもとで学んだ留学生の同窓会を楽しんだ。ソウルでの泊まりは、江南のキリスト教施設。

最終日24日は、明洞カトリック教会内の生協で交流、南大门市場ショッピング(冬ソナの葉書をたくさん買った)などなどをした。明洞で「お好み焼式アイスクリーム」を食べた。美味しかった。鉄板ならぬ鉄冷板の上で牛乳を固めてその後お好みのバナナやイチゴをのせてちょうどいい具合に固めるのである。聞いてみると韓国のオリジナルとのこと、日本でも絶対流行ると思う。

そして夕方、仁川空港から関空へ。忙しかったが充実した旅であった。



学生センターにある張先生の蘭の絵